

随 想

1970年を迎えて

藤 本 一 郎*



明けましておめでとうございます。

1970年の年頭にあたり、所感の一端を申し述べて、ごあいさつといたしたいと存じます。

近年の世界鉄鋼業は急速な発展をしめし、昨年は5億7千万トンもの生産を達成いたしました。今後も世界経済の成長とともに、一層の発展が期待されております。これまで、鉄鋼業は近代産業の基礎として、人類の進歩と繁栄に寄与してまいりましたが、新しく迎えた1970年代において、この重大な責任を引継ぐと同時に新たな課題に対処していかねばなりません。

本年は、いよいよ文明のオリンピックともいわれる万国博覧会が大阪で開催されます。今回の統一テーマは「人類の進歩と調和」ということですが、このテーマはわれわれ鉄鋼関係者にも多くの示唆を与えていると申せましょう。たとえばアポロ計画の成功によって具体化の緒についた宇宙開発、さらには本格的活動に入った海洋開発など、人類の叡知の進歩につれ、鉄鋼業は新しい市場に向かって調和のとれたシステム産業の強力なメンバーとしての役割を要請されております。

このような重大な責任を果たすためには、革新的な技術開発、効率的な設備投資、新しい需要の開拓、原燃料の開発・確保、情報化時代に対処した教育および訓練など幾多の複雑な問題が絡み合っておりますが、要は世界の鉄鋼業全体が give and take の立場で撓まぬ努力を続けていくことであります。

その一例として、昨年は国際鉄鋼協会の年次総会が東京で開催されましたが、同協会の技術委員会には、わが国からも正式委員として参加し、鉄鋼の技術と製造に関する問題の討議に重要な役割を果たしており、このため当協会内にも国際鉄鋼技術委員会を設置して、世界の鉄鋼技術の向上と国際交流につとめております。さらに後開発地域である東南アジア鉄鋼業の発展を促進するため、一昨年以來当協会が中心となって積極的な国際協力を行なってまいりました。本年はその成果が実って、10月には東南アジア8ヶ国を中心とするアジア鉄鋼協会の誕生をみるにいたりしました。

また、本年の新しい国際交流の試みとして、9月には当協会の提唱により、世界で初めての鉄鋼科学技術国際会議が開催されることになっております。この国際会議には、世界の主要製鉄国20数ヶ国から、学識経験者や鉄鋼技術専門家が参集し、製鉄、製鋼、基礎理論、圧延、鋼板加工、物理冶金および教育問題の7つのグループに分れて、それぞれ独創的な論文が発表され、相互に活発な討論が行なわれ

* 日本鉄鋼協会会長 川崎製鉄(株)社長

る予定であります。新しい時代に対処して誠に意義深くかつ時宜を得たものであると思います。

さらに 10 月には、国際標準化機構 (ISO) 第 17 専門委員会 (鉄鋼) に属する WG 4 (特殊鋼) と WG12 (薄板・亜鉛鉄板) の分科会が、開かれることになっております。現在 ISO にはわが国を含めて 56 ヶ国が加入しており、当協会では、標準化委員会 ISO 鉄鋼部会が中心となって国内の意見調整および ISO との連絡に当たっており、国際的な標準化の促進に協力して活発な活動を行なっております。

以上は、当協会が主催して行なわれる本年の国際会議の大略であります。わが国の鉄鋼業が国際的地位を高めるにつれ、当協会が世界鉄鋼業の発展のために果たさなければならない役割はますます大きく、その責任もいよいよ重くなってまいりますことは当然といわねばなりません。

このような国際交流や協力も今後は「情報化時代」に適應したやり方で推進していく必要があります。今日のような科学技術の急速な進歩に伴い、新技術あるいは新製品の創造、開発の母体をなす各種技術情報は、加速度的に増加しており、まさに情報洪水の様相を深めつつあります。こういう情勢に対処するため、欧米主要国では、政府、学会および産業界の密接な連繋のもとに情報処理の一元化、集中化をすすめ、たとえば主要製鉄国においては鉄鋼協会、金属学会、鉄鋼業界などが一体となり、大学研究機関や民間企業のための鉄鋼情報機関的性格をもって、活発な情報サービスを展開しております。このような情報処理の活動が、これら諸国の高い技術水準を維持し、新技術、新製品の開発を助長する原動力となっていることは明らかな事実であります。

しかしながらわが国においては、各機関、各企業がそれぞれ単独に情報処理に当たっている程度で、学界、業界全体としての組織化や一元化の点では欧米諸国よりかなりの立遅れがみられるのが現状であります。幸い、昨年来、鉄鋼連盟が中心となり業界のデータ・バンク構想のもとに、情報処理に関する問題の審議、検討、立案が進められることになりましたが、いよいよ急増傾向にある一般技術情報につきましても、早急に有効な情報活用体制を確立する必要があると考えます。したがって、当協会が技術情報活動の組織化、標準化のために果たすべき責務はきわめて重大であり、またこの面での国際協力においても、今後はますます大きな期待が寄せられるものと思われまます。

鉄鋼生産 1 億トン時代をめざすわが国鉄鋼業界にとって、この 1970 年代は偉大な飛躍が期待される転換期であります。しかし今後の技術開発は原子力の利用や操業の無人化など、いずれの課題も今迄にない大規模かつ広範な科学技術分野を包含しており、さらには激化の一途をたどる国際競争の中で繁栄を続けるためには、幾多の解決しなければならない問題をかかえております。このためにも、当協会を中心に関係各方面の支援を得て、ますます輝かしい発展を遂げることができるよう、皆様とともに努力していきたいと存じます。

おわりにのぞみまして、皆様の新年のご活躍を祈ります。